特定非営利活動法人
シビルNPO連携プラットフォーム

CNCP通信 Vol 45

平成 30 年 1 月 9 日発行

謹賀新年

安全で豊かな暮らしを支える社会の基盤づくりをめざして

- **先人の築いた歴史と文化を学び、次代につなぎたい**
- **長年培った経験と知恵を社会に活かしたい**

●CNCP はあなたが参加し楽しく活動する場です●

今月のひとこと

第 1 回 CNCP サロンを開催しました。

このコラムを初めて 9 回を重ねました。この間に CNCP サポーターになっていただいた方が約 60 名になり、試行してきたサポーターミーティングを CNCP サロンと名称変更し、第 1 回を 12 月 12 日に開催しました。うなぎ研究の第一人者、海洋生物学者の塚本勝己先生の楽しい講演で盛り上がりました。開催報告は別に載せますが、CNCP 活動活性化の要として、サポーター制度を強化していく所存です。折に触れ広報しますので、サポーターへの参加登録をよろしくお願いします。　（代表理事　山本 卓朗）

Vol.45 コンテンツ

巻頭言	日本版 CCRC 事業を模索する	山本 卓朗	2
コラム	ヴィクトール・フランクルによる人間性心理学と自己超越性	皆川 勝	3
トピックス	第１回 CNCP サロン　講演報告　＜うなぎ１億年の謎に挑む＞	奥田 早希子	4
明治 150 年企画（5）	我が国の長寿命化と人生計画	廣谷 彰彦	7
会員紹介	広島の発展に死力を尽くす！	ＮＰＯ法人 州都広島を実現する会	9
部門活動紹介	NPO ファイナンス⑻ SIB 研修会（その１）	サービス提供部門	11
シドニー視察旅行記（2）～　ようこそシドニーへ　～		秦泉寺 哲	12
会員からの投稿	会津藩の医者 加賀山翼（前編）	三井 もとこ	14
サポーターからの投稿	WIN-WIN のよきパートナーに	山崎 晶	16
お知らせ	CNCP アワード「市民社会を築く建設大賞 2018」		17
事務局通信			18

日本版 CCRC 事業を模索する

（特非）シビル NPO 連携プラットフォーム

代表理事　山本　卓朗

明けましておめでとうございます。

あっという間の 1 年でしたが、高齢化がますます進み、気候変動も大きく難題がどんどん増えているように感じます。

CNCP 活動も設立から 3 年経ちましたので、全体の見直しを行うべく、見直しワーキングを立ち上げ、現在精力的に議論を進めているところです。大きな課題である財政基盤につきましては、目下のところ、そのほとんどが賛助会員の皆様からの会費でまかなわれていますが、設立時から社会的ビジネスの事業化による自立を目指しているところです。とは言っても営利企業の体制ではないので、おのずから限界がありますが、少しずつ可能性を求めて事業ごとの研究会に会員や企業の参加を願って進めているところです。

その一つに、日本版 CCRC 事業「生涯活躍のまちづくり」があります。

CCRC とは Continuing Care Retirement Community の略ですが、政府のまち・ひと・しごと創生本部のウェブなどで詳しく載っているので省略するとして、CNCP がめざす CCRC は

「社会の第一線を退いた高齢者が若い世代とともに暮らし、地域社会と交流しつつ、孤立することなく、適切な健康管理をしながら健康寿命を延ばし、仕事や余暇を楽しみながら生活できる地域社会」です。

現在モデル地域として南房総に絞って、地域の状況の把握等を行っていますが、例えば空き家比率は、勝浦市 36.8、いすみ市 28.6、鴨川市 26.3 などと高率であり、また高齢者比率は、御宿町 40.6、南房総市 37.5 などとなっています。南房総にある大規模団地でもかなりの高齢化が進んでいるものと思われます。私が住む大網白里市の季美の森住宅地はゴルフ場と一体開発した 1500 戸の住宅地として、かなり知られていますが、開発から 30 年もたっていないのに、高齢化が進みさまざまな課題を抱えています。現在「ミライズキミノモリ」という将来を見据えて積極的に活動を行っている若手中心のチームが、デベロッパーや大学、自動車メーカー、病院などを加えて、住民への参加を呼び掛けています。いずれは季美の森型の CCRC といえるようなモデルに育っていくことを期待しているところです。

理想的な CCRC の新設を構想しますと、住宅地の開発はじめしっかりとしたサービスの共用棟や健康施設の設置が必要であり、かなりの規模になりますから、地域の人口減少や経済動向からみてそう簡単ではないではないと思います。一方、既存の高齢化した開発住宅地を CCRC 化することを考えると、空き家や周辺の公共施設との一体活用を含め、知恵を出すことで小規模な投資で実現できるのかと考えます。まちづくりにたけた NPO の社会活動と地域の自治会組織によるマネジメントは、さほど難しくないので、個別の事業を行う企業の参画があれば実現の可能性が見えてきます。

今年も積極的に活動していきますのでご協力よろしくお願いします。

コラム

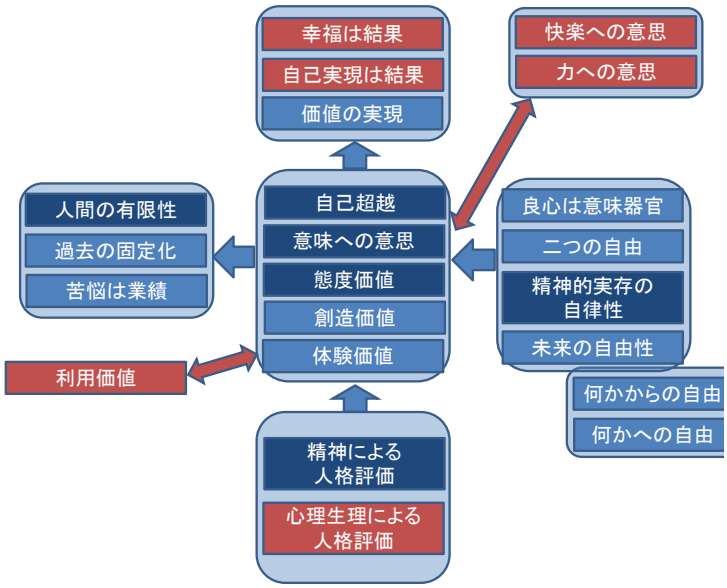
ヴィクトール・フランクルによる人間性心理学と自己超越性

CNCP 常務理事　皆川 勝
（東京都市大学副学長）

CNCP を通じて NPO 活動をされている多くの方々と知己を得て，学ぶことが多いと、常々感じておりました．あのエネルギーはどこから出るのだろうといつも思っておりました．そんな時、フランクルの人間性心理学に出会いました．

フランクルは，図に示すように，人生の意味は，「意味への意思」を持って，態度・創造・体験の価値を生むことにあり，特に自己超越的に態度価値を実現することにより，自己実現あるいは幸福が結果として得られるとしています．自己超越とは自分自身の欲求と関わらないことを意味しており，利他性と通ずるものです．

彼は、他の動物が利用価値をもつのに対して，人間に利用価値を求めるべきではないとし，良心という意味器官を用いて，自律的に束縛されず行動を起こすことができる人間の人格的価値の重要性を説きました．人間は「何かからの自由」と「何かへの自由」という二つの自由性を持っており，前者は束縛からの自由を，後者は行動への自由を意味しています．特に後者の自由は良心に基づいて行動することの自由性であり，これこそが人間の人間たるゆえんであるとされています．自由性を有する行動により，未来は選択され得るのです．



フランクルの人間性心理学

また，人生の意味は，人により，日により，時間によって異なってくるものであり，重要なことは人生一般の意味ではなく，各人の人生の個々の瞬間における態度決定などによる意味であるとされています．また，快楽への意志や力への意志は，意味への意志の喪失により生まれるとされています．このうち、力の意志は，自己顕示・達成・支配などの欲求の結果と見ることができ，これは上位者が意思決定する際に生じ得るものです．一方，人間は必ず死ぬという有限性を有しますが，行動を起こした事実は過去の事柄になることによって固定化され，永遠に生きることができます．また，体験すること自体にも価値を見出し，特に避けられない苦悩を体験することが，それが固定化され永遠化されることで価値となるとされています．アウシュビッツ強制収容所を生き抜いたユダヤ人であったフランクルの人間性心理学は、仕事や人生の意味に迷った時に一つの指針を与えてくれるのではないでしょうか．

（参照：フランクル V.E.（山田邦男訳）：意味への意思，春秋社，2002.7．など）

第１回 CNCP サロン　講演報告

＜うなぎ１億年の謎に挑む＞

CNCP サポーター　奥田 早希子

第１回 CNCP サロンを 12 月 12 日に千代田プラットフォームスクウェア（東京都千代田区）で開催しました。うなぎ完全養殖インフラ整備事業プロジェクトで顧問をお願いしており、ウナギ研究の第一人者でもあるウナギ博士こと塚本勝巳・日本大学教授に「うなぎ１億年の謎に挑む」と題してご講演いただきました。

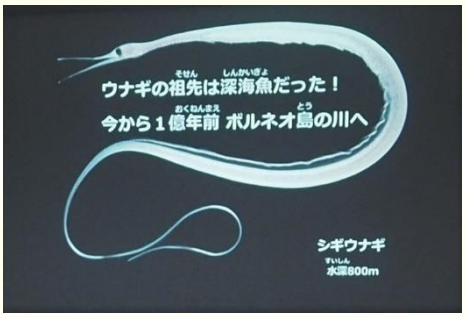
塚本先生は、2009 年マリアナ諸島西方海域でニホンウナギの卵の採集に成功し、それまで謎だった産卵場所を特定したことでも有名な先生です。科学的な話もありましたが、その語りはユーモアいっぱい。参加した方は講演を楽しみつつ、うなぎ完全養殖の必要性や課題などについて学ぶことができました。

以下、塚本先生の講演概要をお伝えします。

＜うなぎ１億年の謎に挑む＞　塚本勝巳・日本大学教授

ウナギは海の魚。海で生まれ、川で育つ

地球に現れた最初のウナギはその昔、深海魚だったようです。外洋の中深層に住んでいる現世のシギウナギやノコバウナギと共通の祖先をもち、現在のウナギとはかなり異なる姿だったようです。１億年前にボルネオ島の川へ遡ったものが、この地球上で最初のウナギになりました。以後綿々と川に遡る習性が引き継がれ現在に至っています。ですから、今も川で成長するウナギは、海に帰って卵を産むのです。



赤ちゃんはレプトセファルスと呼ばれます。普通、動物の赤ちゃんは頭でっかちですが、ウナギの赤ちゃんの頭は小さい。レプトセファルスというのは、“小さな頭”という意味です。

マリアナ海溝で卵から孵ったレプトセファルスは、海流に乗って移動をはじめます。日本近海には黒潮に乗ってやってきます。その間に成長し、４ カ月ほどでシラスウナギへと変態します。変態すると体の水分が減り、体表面積が減って摩擦抵抗が減るために、海流に乗っているのが難しくなって海流から降りる。降りた場所がシラスウナギが河口にやってくる場所ということになります。どこで変態が終わって、どの河口にやってくるのかは偶然でしかありません。

シラスウナギは春にクロコとなり、川を遡上します。中流域で黄ウナギとなって 10 年ほど川で過ごします。そして、成熟が始まると銀ウナギへと変態します。銀ウナギ特有の色は、アジやサバのお腹の金属光沢を持ったグアニンという物質が沈着するためです。そうなると川を下り、海に出て、産卵のためにマリアナ沖を目指します。半年ほどで産卵場につき、産卵し、一生を終えます。

卵からシラスウナギまでの半年が海、黄ウナギで 10 年ほどは川、銀ウナギから産卵場までの半年がまた海ですから、海にいるのは合わせて 1 年ほどしかありません。ウナギは海水魚の図鑑には載ってないことが多く、淡水魚と誤解している人も多いのですが、深海魚が起源ですし、繁殖も海。海に強く依存した魚なのです。

最新の電子工学の粋を集めた装置で謎に迫る

ウナギはマリアナ海溝の一番深いチャレンジャー海淵から 100 ㎞ほど北の西マリアナ海嶺南端部の海山域で産卵します。広い海の中ではほとんどピンポイントと言える狭さです。ここは 4000m くらいの深海ですが、ウナギの産卵は海面から 200m くらいの比較的浅い水深で行われると考えられています。日本で育ったウナギも台湾や中国で育ったウナギも、みんなこのマリアナの産卵場に戻ってきます。日本海溝やフィリピン海溝など、似たような環境は近くにあるはずなのに、マリアナの海でしか卵を産まないのは、不思議でしょうがありません。

こうした産卵回遊生態を解明するのが近年の電子工学の粋を集めて作ったポップアップタグとよばれる装置です。

これをウナギの背中に付けて放すと、センサーが水深や水温、照度などのデータを集めてくれます。タグがウナギから切り離されて海面に浮上すると、人工衛星経由でデータが地上局に送られてきます。そのデータを解析した結果、夜は水深 200m、昼は 800m前後の層にいて、規則的な日周鉛直運動をすることが分かりました。

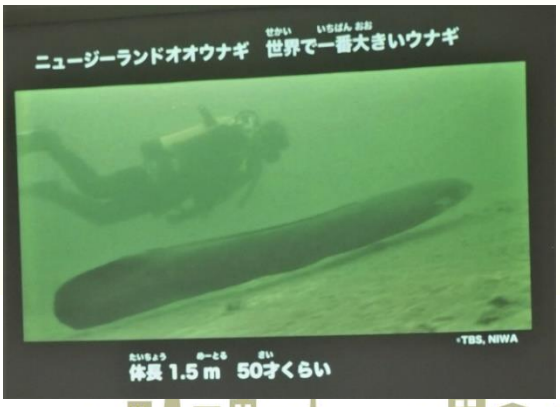
昼間に明るい浅層にいるとマグロやサメに食べられる危険があるため、水温が 5℃くらいの 800m層に隠れているのです。でも、お腹の卵の成熟を進めるにはあったかい水温が必要なので、夜になって捕食者の危険がなくなると、水温が 20℃くらいの浅い層に上がってきます。

これまでの産卵場調査からわかったこと

メスは一回の産卵で 300 万個も卵を産みます。オスが精子をふりかけ、受精卵は 1 日半後に孵化します。卵は孵化直前になると直径 10km もの広い範囲に分散しています。卵は海水より比重が小さいので海中で浮上し、海水密度に大きな変化のある躍層（海面下約 150m）にたまります。卵も孵化した仔魚も北赤道海流でゆっくりと西へ運ばれ、やがて台湾沖で黒潮に乗り換えて日本にやってくるのです。

ウナギは大切な食糧であり、神でもある

ウナギというと、背中が黒くてお腹が白い、というイメージではないでしょうか。それらはすべて養殖ウナギです。天然のウナギは黄ウナギと呼ばれ、黄色がかった複雑な色合いをしています。成熟が始まると、黄ウナギは黒またはこげ茶のいぶし銀のような体色に変わります。これを銀ウナギといいます。



ところで、今は世界に 16 種のウナギがいることになっていますが、3 年前までは 15 種と言われていました。新種が 1 種、フィリピンのルソン島で発見されたのです。アンギラ・ルゾネンシスと名付けたこの新種は私たちの研究室の成果です。16 種の中にはニュージーランドオオウナギのように体長が 1.5mもあるウナギもいます。先住民のマオリ族にとってそれは大切な食糧資源であり、神のような伝説の存在でもあります。これは食文化や資源の持続的利用を考える際に基本的な心構えを教えてくれる好例ではないでしょうか。

お店に出るウナギのほとんど全ては、天然のシラスウナギを獲ってきて養殖したものです。近年このシラスウナギ資源が減って、ニホンウナギは絶滅危惧種に指定されてしまいました。しかしニホンウナギの場合は、パンダやトキのように地球上に現存する絶対数が危機的状況にあるというわけではありません。まだ食べるほど流通しています。その減り方が激しいために、絶滅の危険があるとして指定されたのです。かといって、今のまま資源を放置し、有効な保全策を取らずに利用し続けることは危険です。ニホンウナギが分布する東アジアの国々が力を合わせて持続的な資源利用の方策を練る必要があります。

研究っておもしろい！

鼻紙のようなものでもいいから論文をたくさん書きなさいと先生に言われ、論文も書籍もたくさん書きましたが、その中でダントツのベストセラーは小学校 4 年生の国語の教科書として書いた科学読み物「ウナギのなぞを追って」です。これは何百万人もの子供達が読んでくれています。私自身も「うなぎキャラバン」といって全国の小学校に出かけて行って、ウナギの話をする出前授業のようなものをしています。最初はウナギの研究成果を話し、ウナギに興味を持ってもらえたら、それがウナギの保全にもつながるのではないかと思って始めたものですが、最近では研究の面白さ、ワクワク感を子供達に伝えられたらと、少し方向が変わって来ました。

こんな話もします。2009 年５月、マリアナ諸島の西方海域でウナギの卵が初めて採れた時の話です。採れたその瞬間は喜ぶどころではなくて、私は脱兎のごとく船内の階段を駆け上がり、船長に卵の採れた地点まで船を戻してもらいました。そこからもう一度プランクトンネットを入れ、同じ方向に、同じ水深、同じ距離を同速度で引いてみました。科学は再現性が大事です。誰がやっても何度やっても、同じ条件なら同じ結果が出るはずです。１回目には、ニホンウナギのものらしい卵が３粒採れ、そのうち２粒は遺伝子解析の結果、ニホンウナギでしたが、もう１粒はノコバウナギの卵とわかりました。２回目の曳網の結果、２粒が採れ、今度はそのどちらもニホンウナギのものでした。確かにその辺りにニホンウナギの卵が分布していることが確認できたのです。そして私たちはついにニホンウナギが卵を産む地点を突き止めることに成功しました。世界初のことでした。

その後 2 日間に亘り、30 人くらいの乗船研究者はだれもベッドに入って寝ることなく調査を続けました。卵の水平方向の分布や鉛直方向の分布、海洋環境などの情報が次々に明らかになってきました。あらかた調査が終わり、ひと区切りがついたところでみんなバタンとベッドに倒れこんで寝ました。どのくらい寝たのか記憶にありませんが、目が覚めてみると夕方でした。船はゆったりと船体をローリングさせながら微速前進しています。みんながぞろぞろ起き出してきてデッキに集まりました。そよ風が吹き、気持ち良い夕べです。その時、ようやく卵が取れたという実感がわいてきました。

「本当に卵が取れたんだね～」
「よかったね～、よかったね～」
缶ビールを持ち出し、みんなで乾杯しました。最高のビールでした。

塚本先生がウナギの卵を発見するまでの軌跡を詳しく知りたい方にお薦めです。

「大洋に一粒の卵を求めて：東大研究船、ウナギ一億年の謎に挑む」（新潮文庫、680 円税込）

明治150年企画特集（5）

我が国の長寿命化と人生計画

南房総 CCRC 事業研究会　代表
CNCP 個人正会員　廣谷 彰彦

明治元年は、慶応４年（1868）とすることにされており、この稿が載る平成 30 年(2018)１月９日号の CNCP 通信 Vol.４５は、ちょうど明治元年から 150 年目の刊行であることに気が付き、大変な光栄に緊張している。この間の我が国には様々な天変地異、歴史的事案、事件・事故があまたであり、大きな歴史を辿っている。取り上げられる話題は幾らでもあるが、此処ではわが国民の長寿命化を、見てみたい。

平均寿命とは「０歳の平均余命」であり、我が国の例を調べると文献にもよるが、縄文時代、弥生時代、室町時代、江戸時代初期辺りまでは大括りにしても１５歳くらいで、20 歳に達していない。この大きな原因は、乳幼児の死亡率が高く、我が国では、大正時代辺りまで見ても、乳幼児の死亡率は１５％前後とされている。江戸時代には、「7 歳までは神の子」と言われて、人間の手を離れているように感じられていた（何かがあっても、諦めるしかない)。

他方、平均余命は「その歳に於ける期待寿命」であり、この様な時代においても、５歳児で２０歳程度、14 歳を越えると、いきなり余命が 40 歳、50 歳などであった模様。歴史に名を残す方の年齢が 60 歳、70 歳等がかなり見られる。

当時に於ける寿命の支配要因は、感染症（結核、肺炎、気管支炎、胃腸炎など）、食生活、衛生環境などであり、平均寿命も明治時代始め位までは、30～40 歳くらいだった模様。それが時を経て、1920 年位から感染症への勝利(ペニシリン、予防接種等)、小児医療の充実、栄養状態の改善、健康に係る教育の普及などに加え、妊産婦の対応など、急激に改善してきた。

海外の各国に比較すると、産業革命等によって我が国の先を行っていた欧米各国に対しても、明治以降に追いつき始め、2000 年から後は大いに上まわって、2016 年の予想では、男 80.98 歳、女 87.14 歳となった。文献等を見ると、日本人の平均寿命は、これからも延び続けることが予想されており、近い将来に 120 歳、或いは 150 歳になってもおかしくないなどの研究成果も見られる。

大変におめでたいことであり、自然の摂理に対する大きな勝利であると、胸を張らなければならないところ、昨今の世情においては、逆に困ったことになってしまい、困惑しているような、風潮が見られる。この様な情況に対して、経済産業省の若手グループによる検討成果、「不安な個人、立ちすくむ国家」～モデル無き時代をどう前向きに生き抜くか～（平成 29 年５月　次官・若手プロジェクト）が、様々な示唆を議論している（以下、若手Ｐとする）。

若手Ｐに拠れば、“立ちすくむ”とは、（将来展望が暗く、財政的にも厳しいのに、反転攻勢に出られない情況）を指す。これまでの我々には、「教育･仕事・引退」の３ステージで人生を計画し、定年後は「余生であり気まま」にと言う概念があった。しかし、その夢のような局面を享受できる年代に到達してみれば、社会制度が全く未整備であり、何をどうすれば良いかもわからない。困惑に直面する”不安な個人“に対して若手Ｐはまとめの中で、「これから数年以内には、高齢者が支えられる側から支える側へと転換するような社会に作り上げる必要がある」としている。すなわち「知的好奇心やスキル、知識のある定年後の世代の方々には、引退してしまわずに、もっと社会の中心で貢献し続けて欲しい。いま日本はアジアがいずれ経験する高齢化を 20 年早く経験するのであり、この課題を解決していくのが、日本に課せられた歴史的使命であり、挑戦しがいがある課題である。日本社会が思い切った決断をして変わってみせることが、アジア、ひいては国際社会への貢献にもつながる」、としている。

定年という区切りも世界的に見ると廃止される方向にあり、その原因は、年金制度にあるとされる（例：米、加、英、豪、新、等）。年金制度の逼迫から年金支給年齢を引き上げると、その間の生活は自分で面倒を見る意外に無くなる。一部の職業を除いては、年齢を理由にした解雇は法令で認められない国もあるとのこと。

したがって、これまでに想定していなかった人生の局面が、否応無しに迫ってきており、我々は“立ちすくむ国家”はさておいて、あらためて自らの人生の処し方を積極的に計画しなおして、楽しむ方法を講じたい。すなわち、“支えられる高齢者”から“支える高齢者”への転換であり、その場合の視点は、一般に費用、資産･財産、収入、さらに無形資産の形成と投資とされている。費用には、これから起こり得る生活･健康(病気･怪我)、年金手当額の増減、親族らに拠らない介護の費用等、そして収入、最後に無形資産（家族や友人・知識･健康･など)が挙げられる。

これまでに想定していた年月以上の長い道のりに対して、長生きリスクと称する方々も居るようだが、これから起こり得る情況を、先に示したような各項目に対して、出来るだけ想定･計画して、人生を謳歌するのが、賢いやり方ではないでしょうか。私も、精一杯に頑張ってみたい。

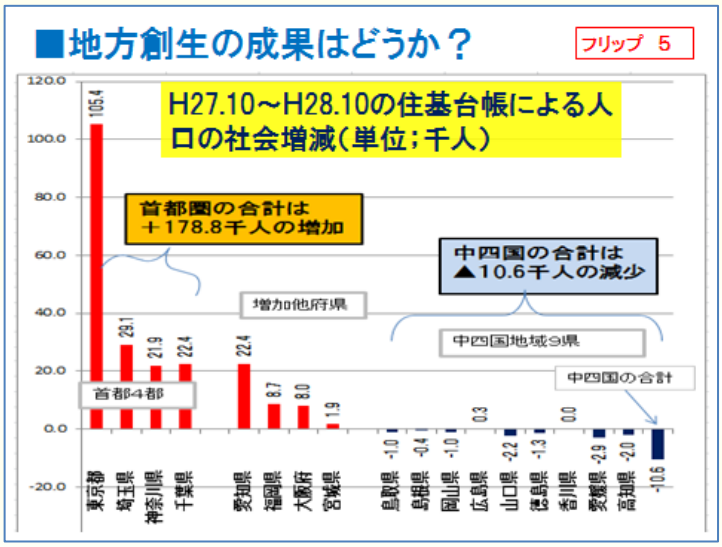
◆ 会員紹介

ＮＰＯ法人 州都広島を実現する会

広島の発展に死力を尽くす！

●はじめに　ＣＮＣＰの正会員で、地方圏で活躍する会員は少数である。これでは、地方の現状を踏まえた「**この国のかたち**」を論じたり、せめて「**建設業の未来**」といった話題、その中で「**CNCPの果たすべき役割**」など、もっと根幹の話題を、もっと具体的に、もっと熱く論じる場が要ると、私は常々感じている。
そこで今回は、前者の話題である「**地方圏における広島の果たすべき役割**」について、本会の活動内容を抽象的ではなく、具体的に紹介したい。おもに調査・設計を主体とするシビルＮＰＯ仲間で、本会のような政策上流部にコミットする団体は、やや少数派に属するように思われるので、「地方発の切実な声」に少しでも関心を持って頂けると幸いである。なお、以下のフリップは 12 月 19 日の広島市議会の「**地方創生特別委員会**」に、本会が制作・提供した一部抜粋で、併せて議会へのスピーチ・ライティングまでのフォローを実施している。

●首都圏の更なる発展へ　本年は我国の好景気がさらに上昇し、日経平均で 3 万円に迫り、世界マネーが日本株に集中し、2020 東京オリンピックで遂に 4 万円との夢のような予測もささやかれる。
右図に示すように、**近年の首都圏への一極集中が更に加速している現象**に如実に表れている。
私のように、地方と東京を月に 2～3 回も往復する者には、「我が国のかたち」が、今、音を立てて変貌している様子が、イヤというほどに解るのである。

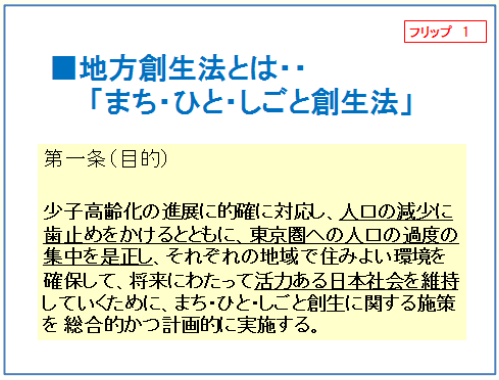


●海図なき未来とは何か？　ところが、ところが・・である。本会の所属する「地域経済研究推進協議会」の主催による、「**今こそ地方創生**」という 12 月 14 日のシンポジウムでは、とんでもない未来の展開になった。論客は地元広大政経学部のトップ、中国財務局長、広銀頭取、地元ベンチャー社長、共同通信経済記者らで、本会からは私を含めて財務省ＯＢ，元広銀支店長、元中国ＴＶ報道キャスターら、数名が参加した。
パネリストが、「海図なき時代の金融とは･･･」という切り口で、「**地方圏の人口減少に伴う地域経済の衰退、そして様々な形の新たな金融の脅威に伴って、近い将来、今の地銀は半減する**」との予想を述べた。
実はこの「海図なき時代・・・」という表現は、中国の EV 攻勢に対して、あの世界に艦たるトヨタ社長が、広島のマツダとの提携に踏み切ったときに述べた言葉だと、発言者は付言した。この話、要約すると近未来に「**中国がトヨタを潰しにかかる**(＝つまり、日本経済の屋台骨を崩す)」という、想像だにしたくない厳しい話である。

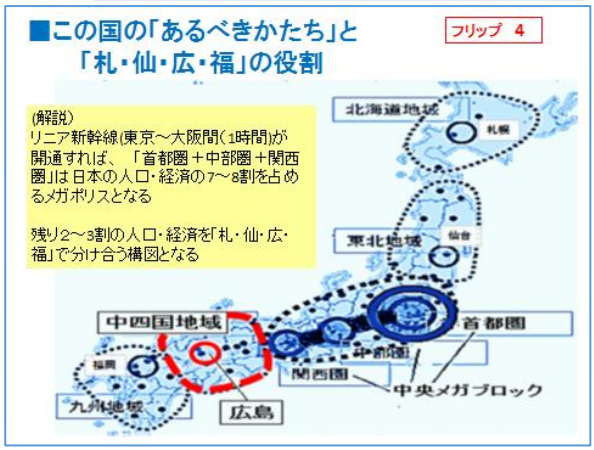
自動車業界を驚かせたトヨタ＆マツダの提携発表

そのことは、その3日後の１２月１７日のNHKスペシャル「**激変する脱炭素革命**」、日本企業は再エネのトレンドに乗り遅れ、世界経済のパラダイムシフトに取り残されるという、衝撃的な未来予測を報じた。松の内が開けるやいなや、「何と大袈裟なことを？」と、ぼやかないで頂きたい。　要するに、「この国の未来は大丈夫か？」という問い掛けであり、はたして今や絶好調にある「我々建設業には無縁な話」なのであろうか？

●いま、地方で何を論じるべきか？　ぼちぼち本題に入りたい。先の広大教授は「私は地方創生が大嫌いだ！」と錚々たる顔ぶれを前に発言される。そもそも通称「地方創生法」、その第一条（目的）に何と書かれているか？　知ってますか？
肝心なのは、「人口の減少に歯止めをかけ、東京圏への人口集中を是正し・・」という部分。同法が施行されて３年、この法の目的は達成されたのか？　要は、そこが一番肝心なポイントなのです。



●広島市のリーダーシップとは？　そこでもしも、この法案が無かったら、「この国の未来はドウなるか？」　これは法案が出来る半年前、2014 年５月に NHK クローズアップ現代で、「極点社会～新たな人口減少クライシス」という番組が、非常に話題になった。（ＶＯＬ１３巻頭言での指摘を参照）
要するに現在、ヒト・モノ・カネの７割が東京～大阪間に集中し、残り３割が広大な地方圏には分散されている。この比率が今後更に拡大し、半世紀後の地方圏は今の半分以下。要は**「この国のかたちは、これでいいのか？」**という問題である。
結論を述べると、地方の目玉「札・仙・広・福」がリーダーシップを発揮し、地方圏の衰退をくいとめること。　広島市は、中四国地域から**「ヒト・モノ・カネ＋チエ」の流出を食い止める「ダムの役割」**が極めて重要になる訳です。



●山陰～広島～四国を結ぶネットワークの強化　（紙面の都合上、いきなりインフラの話題に飛ぶ展開になるが・・）　最近になって、**「山陰新幹線」や「四国新幹線」の実現への陳情**、そして**「第二関門ルート」には国の調査費を復活**と騒がしくなってきた。つまり、中四国地域には、東からも西からも新たな触手が延びている。広島市はこの動きに黙って手をこまねいていると　**「広島だけが取り残される？」**と、私は非常に心配している。そこで本会は[広島のダム効果]を高めるため、広島の「広域交通の３大テーマ」（左図）を訴えている。

①山陰へのアクセス
→ 本会は山陰新幹線の延伸に対応し、三江線の一部と芸備線とを強化し、**「ミニ新幹線網の形成」**を図れ。
②空港へのアクセス
→ バス便はダメ。**「山陽線＋支線で直結」**を図れ。
③四国へのアクセス
→ 船便だけではダメ。本会は四国への生命線として**「広島・松山ルート構想」**を掲げてきた。再度、その重要性を訴え、調査費を復活せよ。

●おわりに　以上は、本会の活動の具体例の一端である。その他にも、１１月からの活動で、**「地方創生と地域金融」**の討論型会議に加わり、地銀数行の経営企画部の連中と、大学教授、自治体に、本会を含めて７～8 名の小人数で、12 月 25 日の最終会議まで計２４時間に及ぶ討論を重ね、地域金融の厳しい現実を理解した。また 12 月には 2030 年を目標年次とする**「広島市総合計画審議会」**の委員に応募しているところである。また、来月には本会直営の広島版ＣＣＲＣ事業のイベント企画を計画中だが、　まあ今後も、様々なチャンネルを最大限活用することで、**「広島の発展に死力を尽くす！」という不動の覚悟**をもって頑張る所存である。　以上。

ＮＰＯ法人 州都広島を実現する会

代表；碓井法明　、事務局長；野村吉春
ＵＲＬ：http://shuto-h.com/

NPOファイナンス（8）

SIB 研修会（その１）

CNCP 常務理事　有岡　正樹

CNCP通信ではサービス提供部門NPOファイナンス研究会活動に関連して、「NPOファイナンス」シリーズ(1)～(7)として連載してきた。このうち(4)および(7)については、ソーシャルインパクトボンド(SIB)に関してであるが、以下の４つのCNCP事業についてその資金調達手法の適用性の検討に入っている。

① ウナギ完全養殖インフラ整備事業

② 電線の地中化事業

③ インフラメンテナンスの国民理解啓発事業

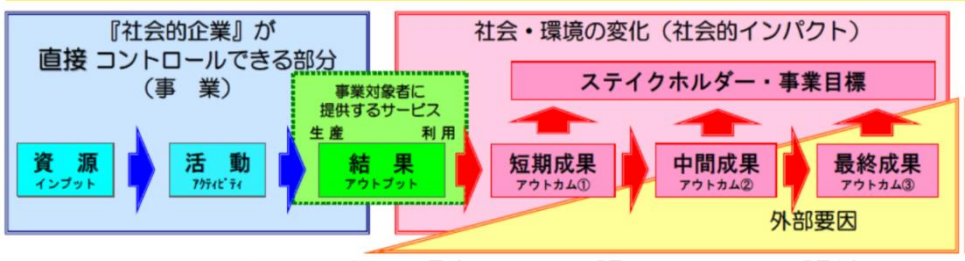
④ インフラメンテナンスの市民との協働事業化

この結果に基づき 10 月 25 日行われた第６回研究会では、社会的インパクト評価の専門家である新日本有限責任監査法人パブリック・アフェアーズグループリーダー高木麻美氏を講師に招いた SIB 研修会（その１）と称して、試行した４つの事業のロジックモデルの評価、指導を受けた。これには、NPO ファイナンス研究会メンバー以外の CNCP 関係者も加えて 13 名が参加した。概要は以下の通りである。

１．社会的インパックと評価概論

参加者のうち足立会員と筆者を除く 11 名については公に SIB に関する研修の受講経験がないので、具体的事例についての評価に先立ち社会的インパクト評価の概論に関する説明を受けた。その内容については今期末までに「NPO ファイナンス研究成果報告書」として紹介するので省略するが、その共通認識的な定義と、その分析に用いるロジックモデルの概念図としては以下のとおりである。

‘短期、長期の変化を含め、事業や活動の結果として生じた社会的、環境的な「アウトカム」を社会的インパクトと称し、その成果を定量的・定性的に把握し、当該事業や活動について価値判断を加えること。’



CNCP 社会的インパクト評価分析のロジックモデル概念図（研修会資料より）

２．試行事業について検討結果発表と意見交換

４つの事業についての個々の結果については、次回「SIB 研修会（その２）」と合わせて報告するが、ここでは評価のロジックモデルとして共通する点について触れておきたい。

・インパクト評価の２つの視点

1）インパクトの定量評価とその SIB 組成の組み立て

2）アウトカムを論理的に評価するプロセスの明確化

今回の試行的検討では、①，②の事業が前者に、③，④の検討が後者に相当する。

・アウトカム評価により事業成果が左右される PFI/PPP この意味でもすごく興味のあるテーマであるので、引き続きその進展について話を聞きたいし、協力できることがあればぜひ一緒したい。

＊３月末ごろ「SIB 研修会(その２)」の開催を予定しているので、関心のある会員の参加を期待したい。

～　ようこそシドニーへ　～

CNCP サポーター、Kumagai Australia　**秦泉寺 哲**

NPO 法人「スリム Japan」の国際会員である橋爪伸浩所長の部下として Kumagai Australia に勤務している私が、今回の５日間にわたる視察団のアテンドをすることになりました。それぞれの訪問地等における詳細は、参加された８人の方々が手分けして書かれることになっていますので、私の方は初日のシドニー地域での状況と、それ以降４日間の概要をお伝えすることにしました。

11 月上旬の金曜日の朝、寒さの続く日本と異なり、夏空のシドニーで SLIM Japan, CNCP による視察旅行が始まりました。シドニー国際空港では到着ゲートにて、夜行便で日本からの総勢８名の一行と合流しました。有岡理事長を除き初対面でしたが、長旅の疲れを感じさせない元気ではつらつとした方々ばかりでした。

王立植物園
（この下をハーバートンネルが通っている）

そんな初日、ホテル到着後荷物をフロントに預けて、シドニー市内の視察。アンザック・メモリアルやセント・メアリー大聖堂などを見ながら初夏の緑が美しいハイドパークと王立植物園を北上し、シドニーの海の玄関であるサーキュラーキーまで約１時間散策しました。そして右にはオペラハウス、左にはシドニーハーバーブリッジという世界三大美港の一角を占める絶景を見ながら遅い昼食を取りました。ビッグバーガーや大盛りのパスタに、もちろんオージービールを注文しましたが、それにレモンを押し込んでビンのまま、まるでラムネを飲むようにというのが当地流と説明しましました。ぐっと喉越しにとはいかないので、食べ物を終わってもまだ少し残っているといった次第で話がはずみました。

そこで１時間ほどすごし、今後の予定の確認や、あらかじめ用意しておいたオパールカード（日本のスイカに相当）、20 ドルの現金などを手渡した後、すぐ横のサキュラーキー・フェリーターミナルから船で対岸のノース・シドニーに移動しました。幸い快晴であったこともあってシドニー湾が一望できる絶景で、ハーバーブリッジやオペラハウス、そしてシドニー市内の高層ビル群が動画のように向きを変えて、見るものを楽しませてくれました。

フェリーから見たシドニー湾の光景
（左側：オペラハウス、右側：ハーバーブリッジ）

最初に訪れたのがタロンガ動物園で、自然の斜面に造られておりユーカリの林の中に動物舎が点在しているといった大きさで、１時間半ほどの時間ではすべてを見回れないのでコアラ他オーストラリア特有の動物を中心ということにしました。ただそのコアラ園は３時までで、それらを遠くに眺めながら、手前のユーカリの木に後ろ向きの２匹を身近に見届けただけに終わってしまって、申し訳ないことをしました。

その後はモスマンの高級住宅街を散策しましたが、夏時間が適用されており、午後７時近くでも明るく、住宅の庭のジャカランダが満開で楽しめました。夕食は、オーストラリアと言えばオージービーフと言うことで、有名ステーキハウスで数キロもある骨つき塊肉のトマホークステーキを注文。しかし、全員であっという間に食べてしまいました。

ステーキタ食会
とトマホーク

ホテルに戻ってチェックインをしたのが 10 時を回っていたのでしょうか。そんな行きつ戻りつの、結構ハードな１日目はとりあえず終わりました。

翌２日目は急遽決定したキャンベラ視察ツアー。朝７時出発、帰りは夜の８時を予定している片道約 300km の弾丸日帰り首都視察ツアーです。到着したキャンベラでは、まずは人工都市であるキャンベラ設立の歴史等が学べる National Capital Exhibition センターへ。パーラメントハウス（国会議事堂）、戦争記念館などを訪問。３日目も朝早くから世界遺産のブルーマウンテンを視察予定であるにも関わらず、ホテルに戻ったのは夜 11 時過ぎと、かなりの強行軍となってしまいました（３日目は同行していないため省略）。

４日目は、シドニー環状道路視察および Kumagai Australia との意見交換。
車でホテルを出発し、まずはシドニー中心部からシドニー空港へと繋がるイースタン・ディストリビューターに乗り、シドニーハーバートンネルを通って、シドニー北部へ向かい、M1、M2 フリーウェイ、レーンコーブトンネルとシドニー環状道路を次々と視察。シドニーハーバートンネル事務所でトンネル PFI 事業の概要について説明を受けた後、Kumagai Australia でオージーサンドイッチでの昼食をともにしながら、他のプロジェクトのことなども話しての懇談会。

最終日は、NSW 州道路局等とのワークショップを行うため、近年開発が最も進んでいるシドニー西部のパラマタへ。豪日双方からとくに道路の維持管理に関連してプレゼンテーションが発表され、それに加えて KPMG の Ruth Lawrence 女史のソーシャルインパクトに関する話題提供もあって、活発な議論が行われました。その後シドニーに戻り、夜行便までの時間を利用して、シドニー大学や再開発により人気の観光エリアとなった、ダーリングハーバーへ。その後、ホテル近くのパブで合流し、最後の乾杯。これにて、５日間の短く、非常に内容の濃い SLIM Japan 一行のシドニー視察は幕を閉じました。

この５日間で、私も知らないシドニーやオーストラリアの事を学べると共に、様々な分野のプロフェッショナルである SLIM Japan, CNCP の方々から、色々な事を教えていただきました。

「会津藩の医者 加賀山 翼 （前編）」

ぶん・え　三井　もとこ

CNCP 個人正会員・理事

高校生の頃、おれは、寺の境内で遊ぶのが好きだった。まだ雪の残っていた３月の昼過ぎ、ひとりで本を読んでいたおれに、本堂から出てきたお尚が、こう言った。

「おい、仁。今日はお前のご先祖の加賀山翼先生の誕生日だぞ。ちょうど良い、墓のまわりを掃除して来い」

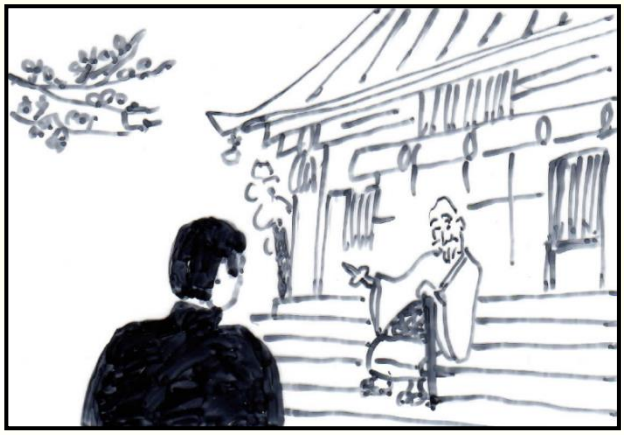
「えっ！加賀山翼って誰っすか？おれ、聞いてないし。」とおれ。

「ほう、知らんのか。この村のもんは、いまでも翼先生、翼先生と慕って、命日の４月２９日には、墓参りに来る人も多いのというのに、その子孫のお前が知らんとはなあ。」

といって、本堂の階段に座り込んで、話しを始めた。

ええか。加賀山翼先生はな、会津藩主、松平容保公の頃に、会津藩の御側医をしていなさった方だ。藩の医者の次男として生まれ、通称潜龍、号を仁山といった。幼いころに、同じ藩の医者の加賀山家に養われて、２４歳で医者となった。

そしてわずか２７歳のときにな、「自分は藩の医者の子だから、藩からお金を出してもらって、医学の遊学（勉強）ができ、江戸や長崎にも勉強に行ける。しかし、町医者の子は、そうはいかない。なんとかならんものか」と考えて、同僚の佐藤雄庵とともに、藩に意見書を出したそうだ。



「「遊学資金財団」というものを作り、医者の家から寄付を募って、その利子で、勉強したいものにお金を出してはどうか」

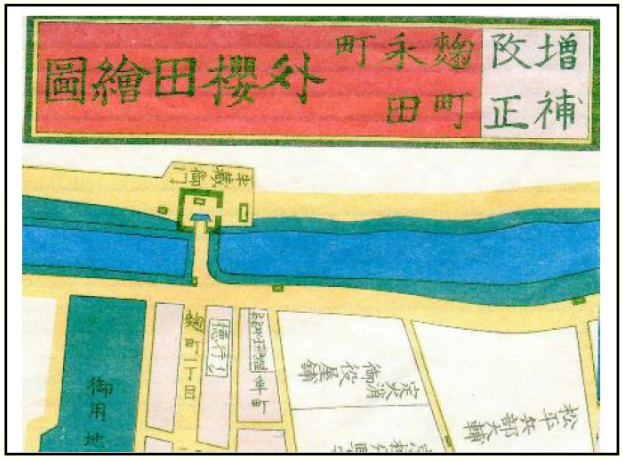
とな。藩もこれを聞き入れて、「遊学資金財団」が出来上がった。身分制度のきびしい時代にだぞ。他の藩ではこんなことはやっていなかった。日本の医学史でも、初めてのことだったそうだよ。

安政４年、翼先生４７歳の時、江戸に勉強に行き、西洋医学（蘭学）で有名な伊東玄朴や織田研斎のもとで学んだ。

安政といえば、ほれ、安政の大獄で有名な井伊直弼が桜田門外で、暗殺されたころだなあ。

その頃、江戸ではコレラという伝染病がはやっていてな、７０万人もの方が亡くなったそうだ。翼先生は、オランダ語のコレラの本を読みあさり、翻訳して、医者たちに治療法を伝え、多くの患者を助けた。これには、伊東玄朴も「加賀山翼は敏達豪俊のもの也」と絶賛していたという。

安政６年６月、翼先生は、もっと皆が西洋医学を学ぶ必要性があると考えて、江戸の御屋敷内に蘭学館を設立することを願い出て、許可され、伊東玄朴や織田研斎、山根敬造らと医学を広めたそうな。



その年の９月、会津に戻ると、藩は日新館医学寮に蘭学科を設立して、翼先生を師範として迎えたという。どうだ、仁、日本で初めての医学所は、この会津からはじまったんじゃよ。

「へーっ、すごいなあ。しっかし、相変わらずお尚の話は長いなあ～」とおれ。

「ははは、ついつい長くなっちまった。そういえばお前の名前は、仁じゃないか。翼先生の名前からもらったんだなあ。」

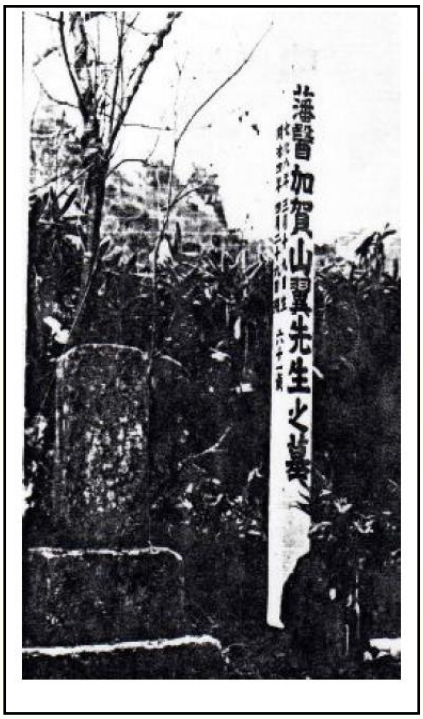
「あ！そうなのか。だけどさ、なんで会津藩からそんな、日本で初めてのことが、次々にできたんだよぉ。おかしくない？」

「それそれ、その話となれば、会津初代藩主の保科正之様のことを話してやらなくてはのお。」

「やば、いいよ、いいよ、お尚。今日はもういいって。」

「ははは、そうか、そうか。では、次の機会に話してやろう。さ、そこまで分かったら、翼先生の墓の周り、掃除してこい。よいな」

「わかった、わかった。」



そういうと、おれは、本堂の下の坂を転げるように下りて、加賀山家の墓に行ってみた。丘の上にあるその墓からは、会津の町が見おろせた。淡いみかん色の夕焼けが、柔らかく町を包んでいた。（つづく）

※加賀山翼は、文化８年（１８１１年）に生まれ、明治４年（１８７１年）に亡くなった。

WIN-WIN のよきパートナーに

CNCP サポーター
㈱熊谷組　常務執行役員　**山崎 晶**

12 月 12 日に開催された第 1 回 CNCP サロンに出席した。世界的なうなぎの大家である塚本先生の講演、学問の深さは勿論、素晴らしいお人柄と活動の広さに圧倒され、小学生も虜にする話術に酔い、あっという間の 90 分を過ごした。今迄、数々の講演を聴講して睡魔に襲われることも少なくなかったが、今回の講演会が一番感銘を受けた。CNCP の行事に参加したのは今回が初めてだったが、このような講師の方を呼べることに CNCP の実力を感じた。

また、講演の間に、２回の質問タイムがあったが、会場から間断なく質問が寄せられた。質問があまり出ない講演会が多い中、年齢は私より先輩のメンバーの方々が代わる代わる好奇心たっぷりに質問する様子はとても新鮮で、メンバーの方々の熱さを感じた。

懇親会には面識のある方も 6-7 人居られ、初参加の小生を温かく包み込んでくれる雰囲気があり、とても居心地が良かった。その場で、ご自身の活動について、ノートパソコンを取り出して熱心に打合せをするメンバーの方も居て、常日頃、熱心に活動して居られるのだな、と感じた。

土木屋の応援団長で「京都インクライン物語」など数々の土木屋の生き様の作品を残した小説家の故田村喜子さんを偲ぶ会のお手伝いをした経緯で、山本卓朗さんとの面識を得て、小生は CNCP へサポーターとして入会させて頂いた。現在は、この田村先生の会を発展させ、様々な組織の若手と、自らの研鑽のための行事や一般市民の方々への行事を、彼ら若手の発案・企画・運営により実施出来ないかとの取り組みのお手伝いをしている。

私自身、自社の業務とは違った、他組織や違う世代の方々との交流や活動で得たご縁で、随分と勉強になったり、翻ってそのご縁が社業に活かせたことも多く、若手の方々にもこうした経験や楽しさを是非味わって欲しいと感じている。

若手は、フレッシュな感性やアイデアは持っているが、業務多忙で、他組織の方々との連携の機会も少なく、活動の後押しをする協力・応援者も居ないのが現状と感じている。是非とも若手主導の具体的な活動を１つでも２つでもスタートしたいと考えている。

今回、CNCP にサポーターとして入会したが、CNCP をサポートするのみでなく、今述べたような若手との取り組みを、是非、CNCP と連携し、そのサポートやご指導を頂けないものかと考えている。粒度分布の良い土は良く締まりやすいように、様々で異なった多様な組織や世代の方々との「連携」は、きっと良い化学反応を生み、お互いの活動の後押し・進展に繋がると強く期待している。

サポーターというより、お互いサポート仕合い、連携し、win-win の良きパートナーであるべく積極的に勉強・活動したいと思いますので、今後ともご指導の程、宜しくお願いいたします。

CNCPアワード

市民社会を築く建設大賞 2018募集

平成29年12月1日（金）～平成30年3月31日（土） 午後5時必着

趣旨

建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業（特にソーシャルビジネス（SB）および企業の共通価値の創造（CSV）[注1]事業）を顕在化して称賛し、広く周知させることを目的としています。また、今後、建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業を広く社会に公表することで、建設界に対する社会の理解を進めることも目的としています。

注1:共通価値の創造（CSV）とは社会的課題を工夫のある事業で解決を図ると共に合わせて企業価値の向上を図る事業を称します。

建設分野とは、広く市民社会に関わる「ひとづくり」、「まちづくり」を対象とした分野であり、具体的には「安心・安全」、「河川・水辺」、「道路・交通」、「住まい」、「自然・環境」などに関する事業を通じて、より良い社会へと改善していく分野を指します。

ベスト・プラクティス賞

●最優秀賞：１点　●優秀賞：数点

建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業
（特にソーシャルビジネス（SB）および企業の共通価値の創造（CSV）[注1]事業）

ベスト・アイデア賞

●最優秀賞：１点　●優秀賞：数点

建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業企画
（特にソーシャルビジネス（SB）および企業の共通価値の創造（CSV）[注1]事業）

副賞としてそれぞれ最優秀賞１０万円、優秀賞５万円が授与されます。

応募条件

次の３つの要素を全て満たすこととします。

①社会的課題を正しく捉えていること。
②建設分野における工夫のある事業であること。
③ビジネスの形態で継続的に活動している事業であること。（継続年数は不問）

※ベスト・アイデア部門では継続性が期待されること
※左記を満たす個人・法人・団体、国内・海外を問わずどなたでも応募できます。

選定委員会

粉川　一郎氏
武蔵大学教授

鈴木　学氏氏
国土交通省　総合政策局
事業総括調整官

山田　菊子氏
東京工業大学 研究員

田村　裕美氏
（一社）ソーシャルテクニカ
代表理事

山本　卓朗氏
CNCP代表理事

募集要項・応募用紙はこちら⇒

下記の URL、または右の QR より応募用紙をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールにて事務局に送付してください。

URL:http://npo-cncp.org/award2018/

《お問合せ先》**NPO法人 シビルNPO連携プラットフォーム**
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町三丁目13番地7　名古路ビル本館2階 コム・ブレイン内
担当：内藤 E-mail：award@npo-cncp.org

【主催】NPO法人シビルNPO連携プラットフォーム　【後援】国土交通省・公益社団法人 土木学会

サポーターを募集しています

サポーターは、12 月末で 63 名になりました。
早く１００人以上の方にサポーターになって頂きたいと思います。
法人賛助会員の方は、会社内で NPO 活動に関心のある方に登録を勧めて下さい。
正会員、サポーターの方は、お知り合いにサポーター登録の働きかけをお願いします。
CNCP 活動の輪を大きくするようにご協力をお願いします。

事務局通信

1．　１月の会議予定

1）１月９日(火)　13:30～15:00：　見直しワーキング
2）１月９日(火)　15:10～16:10：　運営会議
3）１月 15 日(月) 13:00～15:00：　地域活動推進部門
4）１月 16 日(火) 13:30～17:30：　自治体インフラメンテ研究会

2．　１月１日現在の会員数

・　法人正会員 17、個人正会員 28、法人賛助会員３３　合計 78
・　サポーター63

事務局
お問い合せは
こちらまで

特定非営利活動法人
シビル NPO 連携プラットフォーム
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町三丁目 13 番地７
名古路ビル本館２階　コム・ブレイン内
事務局長　内藤　堅一：info@npo-cncp.org